

近代オリンピックが政治・国際関係に与えた影響

The political effect from the Olympics

1K10C252-1 田中 敬太

主査 志々田文明 先生

副査 リー・トンプソン 先生

はじめに

現在日本ではいくつかのプロスポーツが存在する。Jリーグを筆頭に地域密着という言葉が掲げられ、国民が身近なものとしてスポーツを感じやすくなっている。しかし、その一方でスポーツは好きな人と嫌いな人に分かれやすいものであり、国民のライフスタイルに取り入れられた、絶対になくしてはならないものとしては捉えられていない。原因としてはいくつか考えられると思うが、私が一番大きいと感じているのは、スポーツの価値があまり理解されていないということである。スポーツというものが社会の中でどのような価値を持ち、社会に対してどのような働きかけを行うことができるのか。社会に大きな影響を与える可能性のあるものであるということを理解させることが、スポーツの価値を高め、国民のライフスタイルにスポーツを取り入れるための近道であると私は考える。よって私は本研究で、メガスポーツイベントとして最も社会に影響を与えているであろう近代オリンピックを取り上げ、1) オリンピックが社会に与える良い影響、とりわけ政治・国際関係における平和的側面での影響について事例を挙げて考察し、(2) それを通してオリンピックの持つ価値について考察することにした。なお、本研究は文献研究である。

1. オリンピック開催の背景と創設者クーベルタンについて

オリンピックを創設したのはピエール・ド・クーベルタンである。クーベルタンは、教育という側面からスポーツに興味を持っていくこととなった。クーベルタンに大きな影響を与えたのはイギリスのパブリックスクールであり、そこからクーベルタンは教育にスポーツというものが身体的側面に限らず心理的側面に対しても大きな影響を与えるものであると感じるようになっていった。オリンピック開催に大きな影響を与えたのが万国博覧会であり、オリンピックの開催は 1894 年のパリ国際会議にて決定した。第一回の開催地についてもアテネに決定した。

2. オリンピックで社会に向けて好影響となるメッセージが発せられた事例① ～北京五輪でのピストル競技での一幕

北京オリンピック開催中、第二次南オセチア紛争が開戦した。これは、オリンピック停戦が破られたことを意味している。そんな中、私が注目したのは射撃女子エアピストルの表彰台での一幕である。この競技で銀メダルに輝いたのはロシアのナタリア・パデリナ選手（32）であり、銅メダルに輝いたのはグルジアのニーノ・サルクワゼ選手（39）であった。南オセチア紛争の当事者であるロシアとグルジアの選手である。戦争が激化している中での表彰式であったが、両選手は表彰式の後に歩み寄り、抱き合ったのである。これは、オリンピックが政治を排除する存在であること、オリンピックが一つのスポーツイベントという枠組みを超えて、紛争に対して平和的なメッセージを発する社会的に価値のあるコンテンツであるということを示す出来事となった。

3. オリンピックで社会に向けて好影響となるメッセージが発せられた事例② ～バルセロナ五輪でのユーゴスラヴィア独立参加～

旧ユーゴスラヴィアでの紛争は非常に大規模なものであり、これに対して国際連合は国際スポーツ競技会を含めた全ての国際交流を禁止する旨を含めた制裁処置を発動していた。そのため、旧ユーゴスラヴィアはオリンピックに参加できないこととなっていたが、国際オリンピック委員会がオリンピック停戦を公に復活させ、どうか旧ユーゴスラヴィアの選手がバルセロナオリンピックに参加できるよう国際連合と交渉した。その結果、様々な制限がある形態をとることとなった国があるものの全ての旧ユーゴスラヴィア連邦の国・地域の参加が認められることとなった。これは、オリンピックが政治の力を排除した例であり、非常に大きなオリンピックひいてはスポーツの勝利へとつながった。

結論

オリンピック大会は今日では国家の経済的・政治的バックアップなくしては開催できないほど肥大化している。開催国は国威発揚の場また経済をとませる場としてこれを利用しているが、そうした中でも政治や国際関係のみこまれずに、平和の祭典としての役割を持ち続けている。そういった意味で、社会に強い影響を持っているものであるということが言えるだろう。